



# やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

## つながりを確かめて

4月以来、とんと出会えずにいた姪っ子、甥っ子たちに久しぶりに出会った。中学生の姪っ子は、青春まっさかりといった感じで、明るくはずんだ話を聞かせてくれた。中学生になりたての長兄の甥っ子とは、「ずいぶん大きくなったなあ、背がおじさんと同じ位になってきた、体つきもがっしりとしてきているし…。」と、そんなやりとりをしていたのだが、これをさえぎるようにして、もう一人の甥っ子が、「ぼくの背も伸びたよ。」とやってきた。そしてそこに、末の甥っ子が加わって、ぴよんぴよんはねながら、「ぼくはおじさんのこのあたり！」と私のお腹をとんとんつついてくる。「おじさんはね、勤めている学校の子どもたちを見ていて、その中に時々、君たちがいるんじゃないかと思うことがある。同じようにちゃんと教科書開けて、先生の話の聞いているだろうかってね…。」甥っ子たちは、時にバツが悪そうに、時にニヤリと照れくさそうにし、私たちはそのやりとりを楽しんだ。

こうした他愛のないことをしながら、とりとめのない会話をすることは、互いの関係を確認合う大切な時間である。別れ際、バイバイの連呼をする末っ子の後ろで、そっと手を上げ合図を送ってくる長兄がいた。今度は姪っ子、甥っ子たちと、どんな出会い方ができるだろうかと、その成長が楽しみになり、自分ももっといいおじさんになっていたいと思えてきた。

その帰宅途上、ふと子どもの頃のことを思い出した。父が仕事で遠くまで出かけたときのことだ。決まって自分たち子どもにおみやげがあったのだ。それは店で買ったものというのではなく、会議の席などで用意されていた茶菓子であったのだが、それを自分たち兄弟のために、大切に持ち帰ってくれていたのである。そんなおみやげを、どんなに小さなものでも、一つしかなくても、少しずつ分けてもらった。食べるおみやげがないときは、父のみやげ話と、母が語る私たち兄弟の留守番話でもりあがった。今から思えば、互いのつながりを確認し合う大切なひとときだったと言える。離れていても、出かけた先で、互いのことを心にとめながらすす、そのことの証として、おみやげの一品、みやげ話や留守番話があったのだ。

大切な人には、自分のことを見ていてほしい、できればほめてもらいたい。見てもらえていなくても、ちゃんと気にかけていてほしいものである。何でもないときに、「そういえば今日はどうだった、なんとなかったかい…。」などと気遣うようなことを言われると、妙にうれしくもなり、ほっとするのである。

痛ましい事件が次々と報道されている。そのたびに、家族であれ、友人であれ、自身を育ててくれている、かけがえのない相手とのつながりが確かめ合える、そんなひとときを大切にしたいと思えてくる。

校長 大林 道範